

カフェイン飲料摂取習慣形成に影響する要因分析の試み

○塚田三香子（聖霊女短大）

（目的）カフェイン飲料摂取習慣は青年期に形成される習慣の1つと考えられるが、カフェインに関してはその依存性の存否に関して議論されたこともあり、摂取習慣がどのような要因の影響を受けて確立するかは興味深い。今回、カフェイン代謝に関与する酵素の1つである N-アセチル転移酵素、および冠動脈疾患の危険因子であるといわれているタイプ A 行動特性に関して、カフェイン飲料摂取習慣との関連を調べた。

（方法）秋田県在住の18-20歳女子の血液を用いて、PCR法により、N-アセチル転移酵素の遺伝子1-4についてその存在を確認した。この結果から遺伝子型を分別し、代謝型を推定した。また、アンケートにより、カフェイン飲料の摂取頻度、摂取する目的、摂取するカフェイン飲料の種類などを調査した。また、タイプ A 行動特性度に関してはKG式質問紙法により、個々の傾向を数値化した。これらから、カフェイン飲料の摂取頻度により、集団を3群に分け、それぞれの集団の N-アセチル転移酵素代謝型出現頻度およびタイプ A 行動特性度を比較した。

（結果）現在のところ、66名の結果が得られている。カフェイン飲料を毎日摂取する集団（1群）、週3-4回摂取する集団（2群）、週1回以下摂取する集団（3群）に分別したところ、それぞれ的人数は15名、33名、18名であり、毎日摂取することを習慣の確立とみなせば、22.7%にカフェイン摂取習慣がある。それぞれの群における N-アセチル転移酵素代謝型は1群で速い：7名、中間：6名、遅い：2名、2群で速い：17名、中間：15名、遅い：1名、3群で速い：8名、中間：6名、遅い：4名であり、3群で代謝型の遅い者の出現頻度が高い傾向はあるが、明確な出現頻度の差は認められなかった。また、タイプ A 行動特性に関しても、1群に高いタイプ A 傾向性は認められなかった。